

ひとりヴァイオリンをめぐるフーガ

テディ・パヴラミ著

1971年生まれ。バイオリン奏者、翻訳家、ジュネーブ高等音楽院教授。

評 青澤隆明

音楽評論家

アルバニアからフランスに亡命したヴァイオリニストが、42歳の年に書き下ろした、22歳までの半生の自叙伝である。1971年から93年までの厳しい情勢と変化を生き抜き、自分の声を見つけたまでの物語だ。原題は「ヴァイオリン独奏のフーガ」。フーガには「逃走」という原義も響いている。

テディ・パヴラミのヴァイオリンを聴いて、私がまず惹かれたのは、その優美さと精確さ

亡命音楽家 感動の自伝

だ。鮮明な技巧が映し出すのは、作品の多彩な様式と表現に対する、彼自身の柔軟な感性である。本書を読むと、人間や世界をみる目の優しさと適切な文章表現が、そうした演奏の美質に繋がっているように思えた。

しかし、音楽家が書いた本であるよりもまず、すぐれた書き手が少年から大人への成長を生き生きと描いた物語というべきだろう。特殊な職業のことも平明に説きつつ、初恋を含む人々との出会いと別れが親しみを込めて描かれている。訳文も読みやすい。最初の師でもある父、アモイヤル、ムローヴァといった先達と同じくらい、家族や周囲の面々がひとりひとり人間味豊かに生きている。

素直な目の柔軟さが、共産主義独裁政権下の故郷からEUにいたる異国へと移り変わる人生のなかで、自身に大切なものを

みつめる。人々への共感や社会へのとまごいも、若い心で率直に捉えられている。たとえば、アルバニアの最高指導者ホッジャも、彼の目にはひとりの人間として映る。故郷の親戚は強制収容所に送られたが、体制への非難や直接的な憤りよりも深く伝わってくるのは生きる不安、個人の恐れと悲しみのほうだ。

サラサーテ・コンクールでの優勝と祖父の悲劇が同期してクライマックスを迎える物語は、聴衆の知る以後の活動に繋がるが、自伝の第2部への期待も大きい。つよく感動を運ぶのは、本書の筆致が冷静さとユーモアをもって素朴に抑制されているからだ。簡潔に律せられた演奏と響き合うように、鍛錬された表現で、まっすぐ話しかける。

(山内由紀子訳/藤原書店 4968円)

